

須弥山が見たい！

君は絶対的なものを求めすぎている。——私が尊敬する先輩からの一言です。この言葉があの日以来、私の心にずっぷりと刺さったままで、時に思い返しては決まって悩み込んでしまいます。

あれは大学からの帰り道でのことでした。所属する学内団体の研修が終わった頃には、あたりがすっかり暗くなっていて時計の針は9時を指していたように思います。寮のカレーを逃した心残りや、先輩と一緒に帰る機会を得た小さな喜びとが混じり合った奇妙な一日の終わりに、私たちは電車に乗り込みました。車内はサラリーマンたちの疲れ切った顔で埋め尽くされて、いかにも東京、いや現代社会そのものを象徴しているかのようでした。そんな中、私たちは大学自治に始まり政治や社会のあり方に至るまで様々な議論に熱中しました。

確か渋谷で乗り換えて2駅目に差し掛かろうとした頃だったと思います。「存在について考えていると、強烈な不安感に襲われるんですよ。無限の空間の中でたった一人、どこにいるのかも分からないまま生きているように感じるんです。」私が小さい頃からずっと考えてきた謎。どうしてもこのことを先輩に聞いてみたくて、自分から話題を切り出してみたのです。数年来考えてきたことですから、自分でもいろんな角度から考察を試みたこともあります。それら一つ一つを拙い言葉で説明しては先輩から反論を受け、負けじと理屈をこねくりまわすという工程を何度か繰り返しました。先輩からは「空間上での自身の位置は相手との位置関係でしか決まらない。」と主張されたのですが、私にはどうも腑に落ちないことがありました。じゃあ、その2人は一体この空間上のどこに居るって言うのですか——私も意地になってこう反論した訳です。その時に、先輩から言われた言葉が他ならぬ冒頭の一文でした——君は絶対的なものを求めすぎている。

最初はショックでした。自分が意識せず絶対的な何かを探していたという事実には驚きを隠せなかったからだと思います。実際に返す言葉に詰まりました。大学に入りいろんな人や考えと出会い、自分の見方が相対化されたのもそうですが、それ以上に、大学の授業の中で、自身が感銘を受けた学者の考えが、次の瞬間に他の学者からの反論の嵐に巻き込まれる有り様を目前にしてきた自分にとって、このことは情けない限りで悔しかったからです。リオタールが言うように私たちは「大きな物語」の終焉を迎えたポストモダンに生きています。全ての物事が相対化して、絶対的なものはもはや見出せず、ある意味で私たちはニーチェの言うような超人にならなければ生きていけない時代に入りつつあるのかもしれない。ただ、今になって私はこの自身の過ちを受け入れることができるようになったように思います。

自身の存在に対する不安——空間上における私という存在の不安定さ——は、まさしく絶対性が失われた現代への入り口にたたずむ私自身のそれに等しいのだと分かったからです。

では、私たちはどのようにして、この不安と対峙すべきなのでしょう。残念ながら今の私には何も分かりません。これまで、多くの哲学者の思想からヒントを得ようとしてきました。唯一分かったことがあるならば、この世界は数多の思想が錯綜し、分からないことで満ち満ちている——ということです。ラッセルの世界五分前仮説を考えると、どれほど科学が進歩しようとも世界がいつできたかは決して分かることはないでしょうし、カントの指摘する理性の限界を真摯に受け止めるなら、人間が本当に理解できるのは自分側の思考できる世界だけです。語りえぬものについては沈黙しなければならない——ウイットゲンシュタインの言葉を持ち出すと、本当は何も語ってはならないようにも思えてきます。

それでも私は語りたい。その一心で大学に入学したようなものです。今、インド哲学を少しずつ勉強しています。梵我一如。最初はこの音の響きが綺麗だというたわいもない理由から志したことです。しかし、今はある種の確信のようなものが私の心の中で醸成されているように思います。今まで必死になって食らいついてきた西洋哲学——ある意味で絶対視していたのかもしれませんが——を初めて相対化するチャンスが目の前に広がっている、そんな予感がするからです。

古代インドの世界観の中心には途方もない大きさの須弥山がそびえたっています。しかし現代を生きる私たちにはもうそれを見ることができません。もっと正確に言えば、物質主義に飲み込まれた現代において、もはや誰も須弥山を見ようとしなくなったのかもしれませんが。それでも私はあえて時代に逆らってみようと思います。須弥山を肉眼で見る日が来ることは確かにないでしょう。須弥山は物質ではないからです。でも、私は信じています。いつか須弥山を観る日が来ることを。その時、私は初めて世界を理解するのです。

汝はそれである——ウッターラカの言葉。